

ある人の話

こ　ろ　し

「お多忙の處を、お呼び立てして、すまなかつたね」僕「いえ、どう致しまして」「どうだい、繪は面白いかい」僕「やり始めて見ると、別段面白い事ありませんが、感興に乗つて描いて居る時は、愉快です」「うむ、何事でも、やつて見ると、存外つまらないと思ふものさ、とにかく、繪によらず、總て藝術は技術の研究を怠たらないと共に、人格の高上を計らなければいかんぜ、人格の高いんでなければ、立派なものには出来ないからなあ」それはそうと、君は大倉商業にゐたのだね、なに、本科一年迄行つたか、おしい事をしたな、卒業迄やればいゝのに、何にをやるにした處で、普通教育だけは受けて置くものだよ」僕「勿論中學なら卒業するつもりでしたが、商業じゃ宗旨違ひですから」「いやそうでないよ、然し君は始めから畫家になるのじやなかつたのだらう」僕「はい、始めは父の遺言もあるし、親類の勧めで、わけも分らずに、大倉へ入つて見ましたが、やはり自分の好きな道を、やつた方が成功する様に思つて居る矢先に「中學世界」でしたかに、黒田さんの事が出て居りました、それは先生が、佛國へ政治の研究に行かれて、それをやらずに、自分の好きな繪をやつて、却つて成功したといふ……」「それで、君もやり始めたといふのだね。そりや輕卒だつたね、第一君は、黒田さんと同じだと思ふから間違つて居る、黒田さんは、

どれ程の天才であつたかわからんじやないか——こう云ふと、甚だ失敬だが、或は君の方が、天才があるかも知れないが、然し、物事は悪くかんがへて、丁度いゝのだから——。「もつとも繪でもやらうといふ人は、多少の天分がなくては出来るものではない、然しこれから畫家にならうといふには、よほどの天才で、頭腦のしつかりした感覺の鋭い人でなければ、まあ駄目だね」成る程普通の人でも、千年でもこつ／＼やつたら、所謂一人前にはなれるだらう、然し君が、こつ／＼主義なら、斷然繪をやめる事を、僕は御勧めするね」然し僕は未だ君の繪を一度も拜見しないし、どんな處に、天才があつて、成功しないとも限らないから、全然やめるとはいはない。いや全然やめるのは、大反對だ、やり始めたからには、何處迄でも大成させるさ、たゞ細く長くやる様に、したらどうだね、つまり何にか、安全な職業にたづさはつて、其の傍ら繪をやるのだ」僕だつて、一生大學や高等學校へ出るのが目的じやないよ。今に何か公にするつもりだ、つまり教師は方便の生活なのさ」成る程方便の生活といふやつは、つまらない、けれども繪なり文學なりによつて生活を立てるには、自分の好きなものばかり描いて、賣れればよいが、そうはいかぬ、どうしても、色つけ寫真もかゝねばならぬ、素人好きのするのるかゝればならぬ、隨つて製作に影響を及ぼしてくる、下劣なる分子は進入する、俗悪なる色彩は、つきまとつて離れなくなる、こうなつちや自己も糞もあつたものぢやない、實にあはれむべき事じやないか、そりや、よ程

しつかりした人なら、是等の事に打ち勝つけれども、まあ普通の人は、金銭に負ける方が多いから、それよりは、方便の生活によつて、傍ら自分の好きな仕事をした方が、いいじやないか、又、其の方が、たしかに、藝術的氣品のある作が出来るといふものさ」昔から専門にやつて、成功した人が多いと同時に、アマチュアで成功した人も、ずい分あるよ、なに、もう三年と専門にやつてから、職業をさがすといふのか、そりやよくないぜ、繪なんていふものは、深入りすればする程、やめにくゝなるものだからね」「ずい分君にはにが話だつたらう、然し悪くもつてくれてはこまるよ、僕も君と同じ地平線をたどつて居る様なものだから、君がむやみに、先きの事も考へずに、たゞ夢の様にやつて居るのでは、ないかと思つて、注告した迄だから……」「僕は一人で、心の中に思つて居るのが、きらひだから、遠慮なしに言つたのだよ。實際今の繪かきの先生は、むやみに弟子をおだて上げて、浮ぶ瀬のない様にしまうのが多いからね」とにかく、よく考へて見てくれ給へ」僕「はい種々と有りがとう存じました、いづれ熟考して、お返事いたします。」

春の一日

赤城泰靜

明治四十五年と云ふ年を迎へたのは遂い昨日の様に思はれたの

に、もう早一年の四分の一は消えてしまつた、丁度よく晴れた青い空にぼつりと浮み出た白い煙のやうに、暖い風と共に人々は羽織の重さを感じて來た、木や草も世の春と共に装を競ひ、冬の間のかたい眠りからさめて新らしい今年の空氣に浴そうと芽を出し初めた。暫く外へも出て見なかつた私は、心地よい風の春だ春だと云ふ叫びに追ひ立てられて、一日上野に遊んだ、手し固められたやうな町々にも、いつか暖い光が漲つて、何から何まで浮き立つてゐる、灰色に覆はれて、沈んでゐた上野の森も若葉や花がおだやかな目光に照されて明るく輝いて、花の下は暗い見物人が呑氣さうに動いてゐる、よくもこの様に遊んで居る人が有ることだと自分も其一人である事さへ忘れて感嘆した、人ごみを別けて美術新報社主催の展覽會の見物人の一人となつた、私がわざ／＼今日こゝまで來たのは、花を見る爲でも人を見る爲でも無かつた、其等に對して多少の興味を持たぬでもないが、わざわざ出掛ける程私の心を引く力はない、只この展覽會の中に陳列されてある、青木繁氏の遺作に接し度いばかりで有た、場内には洋畫家の試みた半切畫が五月蠅くいやに澤山並べられてある、其等の多くの中には面白いものも多少は有つたが、誠に微々たるものであつた、快よき調和を畫面の中に保つて居るものは惜しい事には數限り無き程の中に、ほんの僅であつた。つまらなく疲れきつた私の頭や目や體は、最後の室に入り、氏の遺作に接し、覺えず身慄をした、目の中には涙さへ浮み出し